加茂遺跡をめぐる諸問題

禰宜田佳男
大阪府立弥生文化博物館　館長

はじめに

2023年春、関西大学博物館が開催した「摂津加茂遺跡発掘70年展」の展示を見学させていただいた際、本書への執筆の機会を頂戴した。筆者がふさわしい立場の者なのかとも思ったが、個人的には「思い」のある遺跡でもあったので、執筆させていただくことにした。

本稿では、加茂遺跡の調査研究を進める上で筆者が重要だと考えることがらと史跡として今後活用するにあたっての私見を述べさせていただくことで、責を果たしたい。

１　研究史上の加茂遺跡について

（１）明治末から大正初期の「弥生」遺跡

加茂遺跡は1915年（大正４）笠井新也によって学界に報告されたことはよく知られている（笠井1915）。そして、それより古い1911年（明治44）には現在「栄根銅鐸」と呼ばれる銅鐸が発見されていた（梅原1927）。この銅鐸は加茂遺跡が立地する台地の東側崖下からの出土で、現在は加茂一丁目にあたるので、本来は「加茂銅鐸」と呼ぶべきとする意見がある（岡野2006）。

加茂遺跡の発見は大正初期に遡ることなのでまず、笠井の報告以前にすでに知られていた遺跡をみていきたい。この頃は石器時代遺跡として報告されており、縄文時代のものも含まれていることは言うまでもない。

もっとも古くに発見し紹介された遺跡は大阪府国府遺跡であろう。「弥生式土器」発見が紹介されたのと同じ年の1889年（明治22）に報告がある。発見の経緯とともに、畿内式打製尖頭器（打製石剣）と呼ばれている石器の先端が出土し「石鎗」として報告されていた（山崎1889）。

現在では畿内地域（以下、旧国名につく「地域」は略する）を代表する拠点集落である奈良県唐古・鍵遺跡が学界に報告されたのは、1901年（明治34）のことであった（高橋1901）。報文では「磯城郡川東村大字鍵の遺跡」に唐古という池があり、その池と南に遺跡があるとして、採集された土器や石器を図入りで示している。ちなみに現在、石小刀と呼ばれている石器は「石鋸」として説明している。

加茂遺跡が所在する摂津でも明治年間から踏査され、その報告が相次いでいた。現在の芦屋市から神戸市域にかけての六甲山南麓において石斧などの石器発見記録（村上1909）、西宮市の甲山周辺や仁川沿いにおいて石鏃（半加工品、未製品を含む）や石斧などを採集した報告（吉井1913）、甲山周辺などで石鏃の採集がおこなわれた報告（大野1914）などである。

なお大阪府では、四ツ池遺跡も先の吉井太郎や大野雲外によって遺跡の存在が知られていた（吉井1913・大野1914）。

このように、加茂遺跡は全国で遺跡の発見が相次いでいた時に調査研究が始まった遺跡であり、その歴史は非常に長いということを改めて確認しておきたい。

（２）笠井新也の報告

このように、摂津で多くの遺跡が発見されているなかで、笠井は加茂遺跡を報告したのであった。採集されたのは、表題にあるとおり石器類・弥生土器・須恵器・玉類であり、それぞれの採集地点を図示し、石器時代（＝弥生時代）と古墳時代の遺跡であるとした。

採集遺物はそれぞれ報告されたが、石器に関しては詳しく内容が紹介されている。図示されていないが、石斧は磨製で「蛤刃のものと、扁平な板状のものとの二種類」があるとしている。太型蛤刃石斧と命名されたのは1934年（昭和９）のことだが（江上ほか1934）、両刃磨製石斧に「蛤刃」という言葉を使用した初見である。畿内式打製尖頭器（打製石剣）については「石槍」と呼んでいる。「石小刀」は三角形を呈していて大型の石鏃というべきものとしているので、現在の石小刀とは違うものを指しているとみられる。また、「石剣」と報告されているのは現在の磨製石剣である。同じ形状なのに打製は「石槍」、磨製は「石剣」と呼んでいたことになる。「石鏃」については「木の葉形」（現在の尖基式）、「菱形の柄のあるもの」（凸基有茎式）、「三角形」（平基式）、「ハート形」（凹基式）という分類をおこなっていた。

詳細な報告と観察に考察を加えて結論として、多くの遺物が広範囲にわたってみられることから「これ（筆者補足　加茂遺跡）を国府・四つ池の各遺跡とともに畿内地方に於ける三大遺跡と称して可かろうと思う」と述べている。弥生土器に石器が伴うことが確認されたのは1908年（明治41）のことで（鍵谷1908）、その後も弥生土器に石器が伴う遺跡は確認されていたが、笠井は加茂遺跡も弥生土器に石器が伴うことを指摘した。そして、最後に「畿内地方に於ける模範的遺跡というべきである」で結んでいる。

加茂遺跡は拠点集落と考えているが、遺物が広範囲にしかも多数出土したことから、発見当初から大集落として認識され、筆者が関心をもつ弥生石器については当時の認識を知ることができるという点で笠井の報告は今日的にも意義深いということを指摘しておきたい。

２　打製石器について

（１）甲山産サヌカイト

笠井の報告後、藤森栄一もこの遺跡から多量の弥生石器が出土したため、北摂からの粘板岩、山城からの閃緑岩、大和から安山岩の供給を受けた工具の生産地であったことを述べた（藤森1943）。

本格的な調査のメスが入ったのは1952～1954年（昭和27～29）の関西大学と関西学院大学による発掘調査であった。この調査では、５～10cm程度のサヌカイト剥片100点が竪穴遺構内の２カ所で集積していたことが明らかとなり、石器製作のための原材と考えられた。報告書では、サヌカイトの石材は甲山産サヌカイト（以下では「サヌカイト」を略する）と記載されている（関西大学1968）。

甲山産については、石野博信が採石地の調査を実施しその報告をおこなった（石野1966）。それによると、標高250m 以上の東斜面、西南斜面、北斜面の108地点で150余点を採集した。その成果とともに、甲山では石器の製品、半製品の出土は知られていないことを指摘し、「近畿地方では、フタゴナイトとよばれる大阪府二上山の安山岩が石器原産の著名なもの」で、「讃岐サヌカイトとフタゴナイト甲山安山岩は、岩石成分、組織とも大差ないと言われる」、「二上安山岩（ママ）と甲山安山岩は識別できる。前者は緻密で真黒であり、後者「黒」でも、白い斑点を含む」と述べた。さらに「肉眼観察によって大阪湾沿岸の縄文・弥生遺跡（大阪―四条畷・竹之内・国府・昭橋（船橋か）・池上、兵庫―朝日ヶ丘・上の島・田能・加茂・五ヶ山・伯母山（ママ））出土のサヌカイト

類を分類すると、淀川以東は二上安山岩、以西は甲山安山岩という地理的区分ができる。他方、同一遺跡で、時期によりサヌカイト石材が変移するという事実は認められない。」と述べている。さらに石材の搬出については「礫のままではなく、剥片として、あるいは大形の石片の状態で行われたと思われる。兵庫加茂では、それが大量に搬出され、累積していた。」という考察も加えている。

石野の報告は、甲山におけるサヌカイト原産地に関することにとどまらず、金山産と二上山産の流通についての研究の先鞭をつけたという点で高く評価される。また、甲山原産地にはサヌカイトの自然礫とともに多数の剥片が散在していることから、原産地で剥片を作り石材になりうるものだけを持ち帰った、という原産地遺跡における石器生産体制について言及した点でも重要な視点を提供した。日本考古学協会総会の発表要旨で非常に短文ではあるが、密度の濃い内容である。

サヌカイトについてはその後、藁科哲男が甲山産は出土遺物で確認できていないと述べ、分析した加茂遺跡のサヌカイトは二上山産だとした（藁科ほか1977）。その後も、兵庫県東南部地域では多くのサヌカイトの原産地分析がおこなわれたが、甲山産の報告はない。しかし、今回の展示では甲山産のことを取り上げていた点が印象的であった。

各地での分析結果は別にして、石野が踏査するようになったのは、加茂遺跡の調査がきっかけで、文章をみると金山産に近い色調のようである。この時に採集された石材がどのようなものなのかは大変興味深い。甲山産サヌカイトの再調査は、サヌカイト石材の研究史を検証する上で意味があると、今回の展示をみて改めて感じた次第である。

（２）サヌカイトの流通

筆者は、兵庫県東南部の弥生遺跡における二上山産と金山産の比率について、自然科学的手法による分析結果に肉眼観察の結果を併用して分析している（禰冝田2023）。加茂遺跡で実見した打製石鏃等は金山産が１点、二上山産が53点で、圧倒的に二上山産であった。ただし、これ以外に完形の金山産の打製石包丁が出土しており、打製石包丁については現在のところ東限にあたる。金山産の製品は、さらに東に行って河内平野や奈良県域、さらに愛知県朝日遺跡でもその可能性のあるものを確認している。

一方、猪名川を遡上すると三田盆地がある。ここでは二上山産の製品が出土している。この地域での弥生土器は摂津の影響を受けていることを踏まえると、加茂遺跡など猪名川を遡上して三田盆地へというサヌカイトの道があったと考えられる。逆に加茂遺跡では、三田盆地で産出されるいわゆる塩田石製の石包丁が出土しており（高木1999）、両地域で相互交流があったことになる。

加茂遺跡は、二上山に関する南北ルート、金山産に関する東西ルートの両方に関わっていたことが考えられるのである。

３　大型掘立柱建物について

（１）近畿の大型掘立柱建物

加茂遺跡で注目されるのは、居住域の中心で確認された方形の区画施設を伴う大型掘立柱建物である。建物の大半は鴨神社に延びてしまうため全体を検出できていない。が、近畿の掘立柱建物は独立棟持柱をもつものは梁行１間、それをもたないものは梁行２間のものがほとんどである。加茂遺跡の場合、独立棟持柱をもたない建物なので、おそらく２間と推測される。そうなると梁行約9m に復元される。近畿では、独立棟持柱建物を検出した兵庫県武庫庄遺跡の梁行8.6m が最大で、

加茂遺跡の検出例はそれよりも大きくなる可能性が高いことになる。だとすると、弥生時代中期最大級の規模であったことになる。

しかも、この建物の周囲には竪板塀の痕跡を確認している。大型掘立柱建物の多くは周りに区画が伴う場合は溝による。これらは区画があっても、周囲から見えるのに対して、この建物は集落内からは見えなかったことになる。この違いが建物の性格を考察する際に意味のあることだが、類例がないため現状ではこれ以上踏み込んだ議論は困難である。

筆者は、大型掘立柱建物は集落を象徴する建物であり、おもに祭祀空間であったと考えている。絵画土器には独立棟持柱建物とそれをもたない建物の両方が描かれている。土器や銅鐸に描かれている絵画が、農耕祭祀の一端を表現しているのであれば、ともに農耕祭祀に関わるものとすることは許されるだろう。加茂遺跡の大型掘立柱建物も祭祀空間として機能していたものと考えている。

こうした大型掘立柱建物であるが、一カ所で建て替えられる場合、すなわち切り合いがあるものとそれが認められない場合がある。そこで、筆者は下記のように分類をおこなった（禰宜田1999）。

Ⅰ類　　単独で検出される場合

Ⅱａ類　複数で検出され場所を移動する場合

Ⅱｂ類　複数で検出され同じ場所か近い場所で建て替えられる場合

その後、近畿の掘立柱建物を総括した森岡秀人も、「立地点踏襲型」と「立地点一過型」という呼び方で同様の見解を示している（森岡2003）。

Ⅰ類は調査面積が狭いためそう認識することになり、本来はⅡａ類であったものも含まれることになる。Ⅰ類は兵庫県養久山・前地遺跡のように、丘陵上の比較的小規模な遺跡がそれに相当すると考えている。

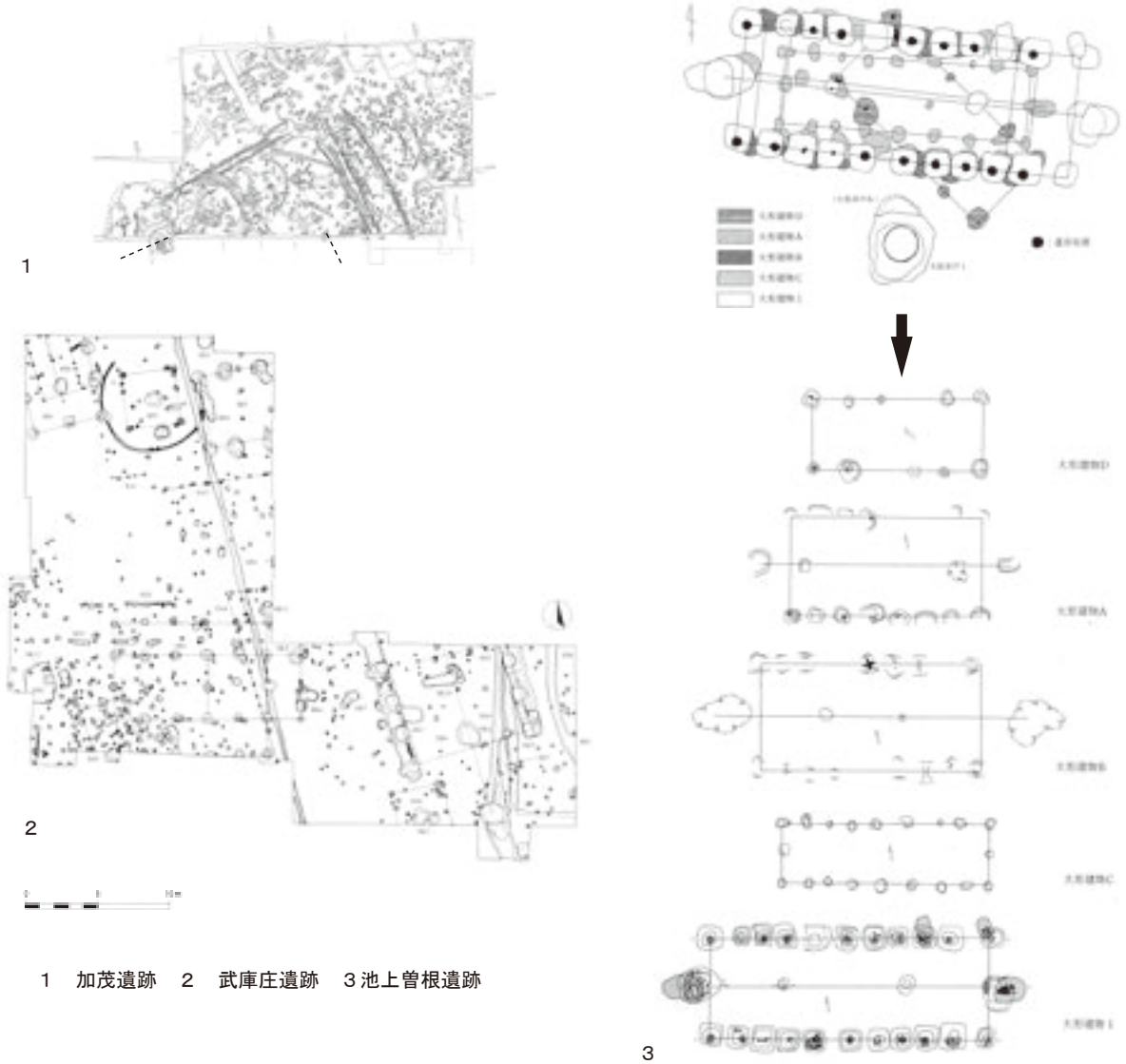
Ⅱａ類では武庫庄遺跡が該当する。直線的に伸びた溝の東西に独立棟持柱をもつ建物、もたない建物が場所を変えて確認されている。

Ⅱｂ類では大阪府池上曽根遺跡が該当する。ここでは、４回の建て替えがあったことが判明している。その変遷をみると、独立棟持柱をもつ建物、もたない建物が同じ場所で建て替えられている。両者は建物構造上異なっているものの、その性格は同じであったと考えた所以である。

（２）加茂遺跡の大型掘立柱建物（第１図）

加茂遺跡の大型掘立柱建物には、竪板塀が２重であったという復元案が示されている（岡野2006）。実は筆者は、竪板塀は１時期１重で、複数時期に存在した可能性があるのではないかと考えている。理由は大型掘立柱建物にⅡｂ類があるからである。図上ではあるが、このほかにも柱穴やピットが等距離に並ぶ組み合わせがないわけではない。しかも、大型掘立柱建物の規模と検出された遺構の深さから、本来の遺構面よりも40～50㎝以上は削平されていたことを考えると、柱穴が削平されてなくなってしまっていることも考慮に入れる必要があるだろう。

現状では、これ以上に議論を深めることはできないが、大型掘立柱建物は２～３時期にわたり機能していた可能性があることを指摘しておきたい。



１　加茂遺跡　２　武庫庄遺跡　３池上曽根遺跡

第１図　独立棟持柱建物等実測図

４　猪名川流域における加茂遺跡について

（１）中期から後期への変化

弥生時代中期の集落が後期に解体することは指摘されて久しい。中期に、加茂遺跡のよう大規模な環濠集落が解体することについては、社会的要因、具体的には鉄器化による流通構造の変化、東アジア世界の政治的動乱の余波がこの地にまで及んだことなどが想定されてきた。これに対して、近年注目されているのが自然環境の悪化という見解である。酸素同位体分析によって、寒冷化と湿潤化が水田稲作の生産量に深刻な打撃を与え、洪水等により低地での居住を困難にしたとの考え方である（中塚2022）。

中期から後期にかけての西摂津での集落の動向については、岡野が下記のように整理した（岡野2006）。

後期に継続しない　　宮の前遺跡

後期に縮小しながらも終末期・古墳時代まで継続する　加茂遺跡
後期に縮小しながらも継続するが終末期まで続かない　武庫庄遺跡
終末期に縮小する　田能遺跡、新免遺跡

近畿中央部では、後期になると高地性環濠集落が出現する。大阪府の古曽部・芝谷遺跡と観音寺山遺跡が著名だが、岡野が示したように、後期に縮小しながらも集落が継続するところは少なくないのである。

つまり、西摂平野では大規模な高地性環濠集落が出現しなかったことになる。当地に近い古曽部・芝谷遺跡との違いがどうしておこったのか。政治的・社会的要因に加えて、自然環境も視野に入れて検討する必要が出てきたことになる。

（２）猪名川流域における加茂遺跡（第２図）

西摂平野の武庫川流域と猪名川流域の弥生集落の数や展開をみると、中期においては猪名川流域の方が遺跡数は多いが、後期になるとますますその差は顕著となる（禰冝田2024）。そして、突線鈕式銅鐸は猪名川流域で確認される。突線鈕２式の満願寺銅鐸、突線鈕３式の如意谷銅鐸、そして加茂遺跡に隣接して発見された突線鈕５式の栄根銅鐸である。また、後期後葉の山ノ上遺跡では小型仿製鏡が出土している。このように、遺跡数だけでなく出土する遺物も猪名川流域の方が青銅器の出土において特筆されるのである。

加茂遺跡の場合、弥生時代後期になると遺構・遺物の量は少なくなり、後期前半の様相は明らかではない。ところが、後期後半になると東西ふたつの集落に分かれ、遺跡東半では竪穴建物が11棟確認されており居住域は３万㎡に達するという（岡野2006）。加茂遺跡の時期と栄根銅鐸の時期が重なるという点は興味深く、栄根銅鐸の配布を受けた可能性があることは岡野の指摘通りである。だとすると弥生後期後半の加茂遺跡は、この地域における拠点集落であったと考えられることになる。

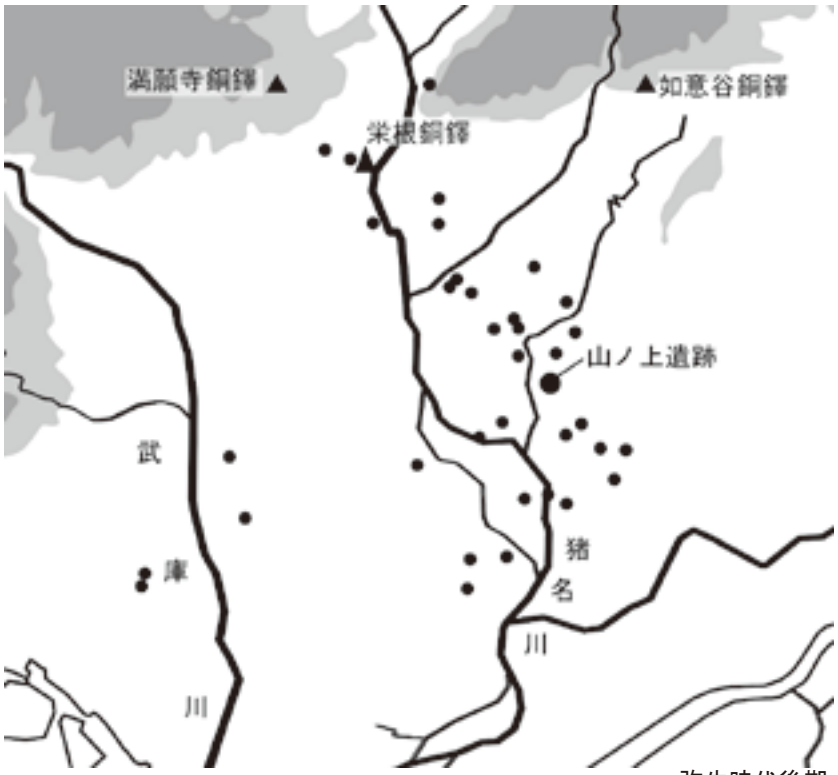
では、武庫川と猪名川での違いはなぜおこったのだろうか。そのことを考える上で重要なことは、後期後葉の猪名川流域では、兵庫県栄根遺跡や大阪府神田北遺跡などで北近畿系の土器が出土している点である。この種の土器は、三田盆地に所在する兵庫県川除・藤ノ木遺跡や日下部遺跡などでも出土している。北近畿系土器は由良川から加古川、さらに三田盆地を経て猪名川下流域へという道が想定されているのである（桐井2016）。

猪名川は最終的に日本海に抜ける道の瀬戸内海側の入り口ということになる。日本海と瀬戸内海を結ぶ南北ルートについては、銅鐸の分布状況からすでに福永伸哉が指摘していたところであり（福永2000）、その後もこのルートの存在を多角的に検証されている（福永編2023）。

加茂遺跡に立つと、東から南には北摂・河内から大阪湾そして瀬戸内海を、北には日本海につながる丘陵地帯を臨むことができる。西摂平野北端における東西ルート、南北ルートという交通上の要衝に位置していたのである。古墳時代前期の前方後円墳がこの猪名川流域に点在していることも、猪名川という地理的要因によるものである（福永2023）。鉄器の流通が本格化した弥生後期後半には、畿内の各集団にとってこの地が非常に重要な意味をもっていたことは容易に想像できる。だからこそ、栄根銅鐸の配布もあったのである。

加茂遺跡は弥生中期はもとより、後期においても畿内弥生社会において極めて重要な役割を果たしていたことを、改めて確認しておきたい。

弥生時代中期



弥生時代後期

＜凡例＞
● 拠点集落
• 一般集落（本来は拠点集落であったとしても青銅器等が出土していないため一般集落と認識しているものも含む）
△ 外縁付鈕式　▲ 突線鈕２・３式　▲ 突線鈕４・５式

第２図　西摂地域の弥生遺跡分布図（岡田2016などから作成）

5 「史跡加茂遺跡」について

（1）人口減少社会における遺跡保護

話は一転して、「史跡加茂遺跡」のことについても筆者の考えを示しておきたい。が、その前に、史跡を保存し活用するにあたっての前提を確認しておこう。それは、日本がすでに人口減少社会に入ったことである。これによって、現在でも行政サービスにおいて取捨選択は始まっており、今後ますます加速化していくことだろう。予算や人員などの点で、これまでならできていたことができなくなってくることが予想される。当然、史跡の整備あるいは活用においても影響は必至だということになる。

しかも、今回のコロナ禍で文化財は「不要不急」の扱いを受け、博物館や史跡公園は閉館・閉園ということになった。人口減少が進むと、行政サービスも取捨選択の対象は拡大し、文化財にはますます「厳しい」事態に陥ることを意識しておく必要がある。

文化財行政自体もそれに対応する取り組みが求められる。筆者は、行政内における他部局とのさらなる連携強化、一般市民の方々については文化財保護に関して参加することから一歩進んで参画することが必要だということなどを指摘した（禰宜田2022）。

行政において立場が弱い文化財部局は文化財部局だけで文化財を保護することは、これから難しくなるとみている。したがって、他部局が文化財の保存と活用が地域にとって必要だということを認識してもらう必要がある。一方、行政ができなくなった部分を市民が担っていくことも必要である。そういう意味で、これからは市民参加ではなく市民参画が重要になってくるのである。

（2）持続可能な整備という理念づくりの必要性

さて、「史跡加茂遺跡」を保存し活用していくにあたり、留意すべき点は指定地が住宅地のなかにあるという点である。多くの方が見学に来ることになると、地域住民のなかには「危惧」を覚える方もいることを念頭に置く必要がある。

すでに出来上がっている保存活用計画書では、池上曽根遺跡や唐古・鍵遺跡のように環濠部分について大がかりな史跡公園計画が示されている（川西市2016）。今後、面的に整備できる状態になったとしても、その頃には市の財政事情も大きく縮小していることになっていると推測される。計画は本当に現実的なのだろうか。

そもそも、遺構復元は予算の確保が可能であった右肩上がりの社会での整備手法だった。現在、文化庁には史跡整備に対する要望が非常に多いという話を聞く。今の時点で予算措置が執られているところは計画通りに進めればいいだろう。しかし、「次」、すなわち再整備はないという認識をもっておく必要があるように思う。

21世紀の人口減少社会においては、持続可能な整備という新たな理念づくりが必要である。「史跡加茂遺跡」でも、これから本格的に「整備」を進めていくのであろうが、持続可能な整備を改めて考える時期にきているのだと考える。

（3）「史跡加茂遺跡」の活用に関する現状

住宅地のなかに史跡指定地が点々と分散しているという点では、世界遺産になった百舌鳥・古市古墳群も同じである。ここでは案内板を立て、マップについては追加指定などで新たな情報が加わるたびに改定して、地元住民や観光客が周遊できるようにしている。また、市民参画という点では、

地域住民がグッズ開発やカレー・クッキー・パンなどを前方後円墳の形にして販売するなどして、地域活性化を図っている。

「史跡加茂遺跡」ではどうなのだろう。現在、川西市では遺跡散策マップを作成中とのこと。指定地のすべてにではないが、案内板は設置されている。そして「川西市文化財ボランティアガイドの会」による遺跡の案内も実施されている。

川西市文化財資料館も指定地の近くにある。展示で筆者が「いいな」と思うのは模型である。専門業者に委託して製作したのではなくボランティアの方々やトライアルウイークに参加した中学生などの手作りで、個人的には親近感を覚える。

このように、「史跡加茂遺跡」を訪れた人に対しては、基本的なところで、ハードもソフトもすでに備わっている。

（４）これからの「史跡加茂遺跡」（写真１）

では今後、「史跡加茂遺跡」はどうしていけばいいのだろうか。部外者が言うべきかとも思うが期待を込めて筆者の「思い」を示したい。

基本的なコンセプトは「地域住民と共存する整備・活用」である。人口減少社会になると、今までのように行政が公園などを準備して人を迎えるという20世紀型の整備が有効なのだろうか。そうした手法の整備とは少し異なる形のものができればと思うのである。すなわち、ソフト面を充実させるのである。理想だと言われるかも知れないが、地域住民が主体となって史跡を活用するという姿を目指すのである。

せっかく史跡に指定されているのであるから、「年中」ということではなく賑わい創出の場はできないのだろうか。大型掘立柱建物が検出された場所で年１～２回程度の「まつり」を、市民が実施し行政が後援するような形はできないものだろうか。マルシェ・キッチンカーも登場するようなことがあってもいいだろう。文化財資料館においては新たな模型製作を市民がしてはどうだろう。また、特別史跡千葉県加曾利貝塚ではボランティアの方々が「研究」したことを発表しているように、市民による研究成果を展示することがあってもいいだろう。月並みだが加茂遺跡をイメージできる、「お菓子」の開発も。地元にはいろいろな「能力」「特技」をもった方がいるはずである。そうした方々の参画を得た活用の取り組みを進めるのである。

「史跡加茂遺跡」では、まだまだいろんなことができる可能性が十二分にあるように思う。これからに期待したい。

写真１　大型掘立柱建物が検出された場所で実施している「弥生のムラスタンプラリー」（ここが指定地のなかでもっとも広い空間となっている）

おわりに

冒頭で加茂遺跡には「思い」があると述べたが、筆者は、兵庫県教育委員会在職時、阪神淡路大震災からの復興に伴う調査で加茂遺跡を担当することがあった。今振り返ると筆者が研究を進めている弥生時代の発掘調査経験は二つしかなく、その一つが加茂遺跡なのである。また、文化庁在職時代には「史跡加茂遺跡」の追加指定に関わる機会があった。加茂遺跡は筆者にとって「思い出深い」遺跡だったのである。

非常に雑駁なものとなってしまったが、加茂遺跡の考古学的なことと、これからの「史跡加茂遺跡」について執筆させていただいた。今回、改めて加茂遺跡の重要性を実感するとともに、その素晴らしい遺跡を後世に適切な形で引き継がれることを切に願うものである。

＊本稿を草する機会を与えていただいた合田茂伸さん・今井真由美さんに感謝申し上げるとともに、本稿を草するにあたり、朝井琢也さん・荒井順子さんにはご教示・ご協力をいただきました。記して感謝いたします。

【引用・参考文献】

石野博信1966「兵庫県西宮市甲山石器原材採石地の調査」『日本考古学協会第32回総会要旨』日本考古学協会
梅原末治1927『銅鐸の研究』大岡山書店
江上波夫・駒井和愛・水野清一1934「旅順双臺子山新石器時代遺跡」『人類学雑誌』第49巻第１号　東京人類学会
大野雲外1914「関西旅行」『東京人類学会雑誌』第29巻第２号　東京人類学会
岡野慶隆2006『加茂遺跡―大型建物をもつ畿内の弥生大集落』同成社
鍵谷徳三郎1908「尾張熱田高倉貝塚実査」『東京人類学会雑誌』第23巻第266号　東京人類学会
笠井新也1915～1916「玉類・斎瓮及び弥生式土器を混出する石器時代の遺跡（1）～（4）」『人類学雑誌』30巻11・12号、31巻１・２号　東京人類学会
川西市教育委員会2016『史跡加茂遺跡保存活用計画書』
関西大学1968『摂津加茂』
桐井理揮2016「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第７集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
高木芳史1999「畿内地方の石包丁の生産と流通」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
高橋健自1901「大和考古雑録」『考古界』第１巻第７号　考古学会
中塚武2022「年輪酸素同位体比を用いた弥生・古墳時代の気候・農業生産・人口の変動シミュレーション」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集　国立歴史民俗博物館
禰宜田佳男1999「有鼻弥生集落の特質」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅳ　兵庫県教育委員会
禰宜田佳男2022「これからの文化財行政を考える―SDGsという視点に照らしてみて―」『遺跡学研究』第19号　日本遺跡学会
禰宜田佳男2023「兵庫県東南部における弥生時代中期のサヌカイトの供給状況」『菟原』Ⅲ　森岡秀人さん古稀記念会
禰宜田佳男2024「弥生時代の待兼山遺跡―猪名川流域弥生社会の特質―」『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』7　大阪大学埋蔵文化財調査室
福永伸哉2000「弥生時代の転換期と七日市遺跡」『七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館
福永伸哉編2023『畿内の地域間関係の解明に基づくヤマト政権成立史の新理解』大阪大学大学院文学研究科
福永伸哉2023「ヤマト政権成立過程における畿内の地域間関係」『畿内の地域間関係の解明に基づくヤマト政権成立史の新理解』大阪大学大学院文学研究科
藤森栄一1943「弥生式文化に於ける摂津加茂の石器群の意義に就いて」『古代文化』第14巻第７号　日本古代文化学会
村上五郎1909「摂津国武庫郡高羽村遺跡調査報告」『考古界』第８篇第３号　考古学会

森岡秀人2003「近畿の様相」『日本考古学協会二〇〇三年滋賀大会資料集』日本考古学協会2003年滋賀大会実行委員会
山崎直方1889「河内国ニ石器時代ノ遺跡ヲ発見ス」『東京人類学会雑誌』第４巻第40号　東京人類学会
吉井太郎1913「摂津甲山付近の遺跡」『考古学雑誌』第４巻第１号　日本考古学会
藁科哲男・東村武信・鎌木義昌1977「蛍光Ｘ線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定　Ⅲ」『考古学と自然科学』第10号　日本文化財科学会